

# 高専卒業後の職場生活

梅 野 善 雄  
(一関工業高等専門学校)

## 1. はじめに

高専卒業生は、就職後は具体的にどのような仕事をしているのだろうか。就職先の規模や業種などについて調査されたものはあるが、仕事の内容については「企画・設計」等の区分によるものがほとんどであり、その具体的内容までうかがい知ることができない。また、職場での生活の様子についても、まとめて調査されたものはほとんどないように思われる。

本校で行ったアンケート調査によると、卒業後の具体的な仕事の内容について、在校生はどの学生も強い関心をよせていることが分かった。それは、学年や成績の上下、あるいはやる気の有無にはよらないものである。他の多くの項目が、これらの属性別にみると、その回答の仕方に大きな差をみせているのに比べて、これは極めて特徴的な結果であった。また、同じ調査で、やる気が弱まるにつれ、卒業後の技術者志向が弱まってゆく傾向もみられた。

高専では、よく「中だるみ」ということが言われる。卒業後の職場生活や仕事の内容について具体的なイメージを持たせることは、それに対する一つの対策ともなるのではないか。それは、学生に自らの学習目標を形成させるためにも、多少の意義があるように思われる。

以上のような考えのもとに、昨年、本校卒業生を対象とする調査を行った。それは、現在の仕事の内容に関する自由記述と、職場の生活の様子を問うアンケートからなる。その結果は、「高専卒業後の職務内容」と題する小冊子にまとめられ、学生に配布された。その中では、卒業生が会社の中でどのような仕事をしているのかが、卒業生自身の言葉で詳細に記されている。また、在校生に対するアドバイスもあるなどして、学生にも好評をもって迎えられた。

特に、アンケート調査の結果を種々分析してみると、就職指導や高専のカリキュラムを考える上で、極めて有益な知見が得られた。それは、高専一般に共通するもののようにも思われるので、ここに報告したい。

## 2. 調査の概要

この調査の対象としたのは、高専を卒業して3～7年目にあたる昭和54～58年度の本校機械、電気、化学工学科の卒業生である。ただし、機械工学科は2学級あるため、機械工学科の卒業生についてはそのうちの約半数を対象とした。

調査内容は、現在の仕事の内容に関する自由記述と、職場生活の様子を問うアンケートからなる。昭和61年7月上旬に発送し、8月上旬までの回答期限をつけた。現在の仕事の内容については、1,000字以内の自由記述を求めたせいもあり、回収率は予想をはるかに下回ってしまった。最終的に回収されたものは、以下のとおりである。

表1 発送数と回収率

	全 体	学 科			卒 業 年 度				
		機械	電気	化学	54	55	56	57	58
卒業数	706	357	184	165	134	132	147	139	154
発送数	555	206	184	165	113	101	112	107	122
回答数	54	19	18	17	10	14	10	10	10
回収率	9.7	9.2	9.8	10.3	8.9	13.9	8.9	9.3	9.0

これをみても分かるように、学科や年度による偏りはあまりみられない。平均すると、1クラス当たりでは3～4名が回答してくれたことになる。1,000字の、いわば作文を課したことを考えると、これはまずまずのものと思わなければならないかもしれない。

しかし、回収率 9.7% の集計結果では、その信頼性に疑問も生じてこよう。そこで、どのような卒業生が回答してくれたのか、調査対象とした卒業生全体の中での、回答者群の位置付けを明らかにしておきたい。アンケートの中に設けられた項目への回答により、彼らの高専在学時の生活をみると、以下のとおりであった。

寮生活の経験のある者は 59.3% (本校は任意寮制をとっている)、クラブ活動を 5 年間続けた者は 51.9%、高専に専門的知識を得るという目的をもって入学した者は 66.6%、在学時に何でも話し合える友人が得られた者は 77.8%、そして、高専を卒業して良かったと思っている者は 72.2% である。

これらの結果を在校生 (5 年生) に対する既存の調査結果と比較すると、いずれも ±5% 以内の差しかみられなかった。しかし、卒業時の成績には、やや良い方への偏りがみられた。アンケートへの回答では、卒業時のクラス内の成績順位は、上位 27.8%、中位の上 40.7%、中位の下 20.4%、そして下位 11.1% となっており、中位の上が多く下位の者がやや少ない。

以上のことを総合すると、この調査の回答者群は、成績面ではやや良い方への偏りはあるが、在学時の生活の仕方などは、ほぼ卒業生全体のそれが反映されているとみてよいように思われる。

### 3. 卒業後の勤務先

ここでは、アンケートの内容をもとに、回答者群の高専卒業後の勤務先についてみていきたい。卒業時の全体の資料との比較も行われるが、その図は紙数の関係で省略した。

まず、現在の勤務先の所在地をみる。図 1 を卒業時のものと比べると、地元の岩手県と東京都の割合が少ないが、大きく東北と関東に分けた場合は、ほぼ同じ割合である。遠く、福岡県や岡山県の者もあり、少なくとも、回答者群が特定の地域に集中しているということはないようである。

勤務先の業種をみると、これも多くの業種にまたがっている。卒業時のものと比べると、「建設」「機械」「精密機械」が少なく、「電気機器」「サービス」「官公庁」がやや多い。しかし、製造業と非製造業の割合でみると、それは卒業時のものと比べてあまり変わらないものになっている。

一方、表 2 により、勤務先の規模を従業員数に

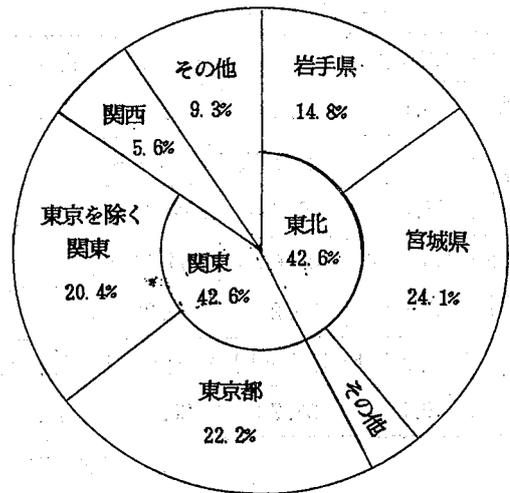


図 1 勤務先の所在地

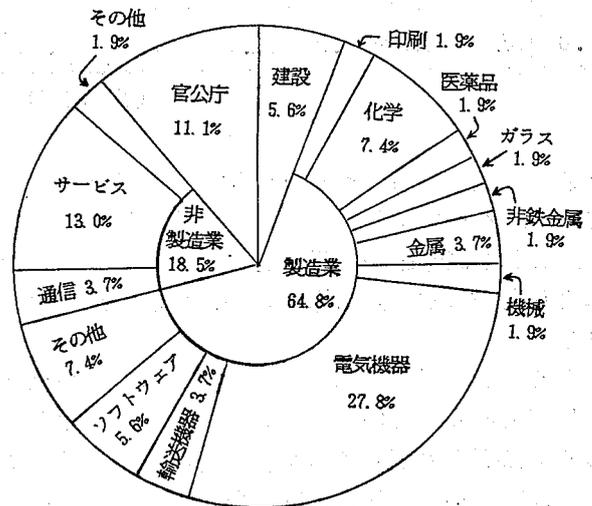


図 2 勤務先の業種

よりみると、従業員数 500 人以上の大企業にいる者が半数以上である。しかし、その割合は、卒業時のものと比べると幾分低い。これは、6 節でも触れられるが、転職して規模の小さい会社に移った者がいるためと思われる。

次に、勤務先での生活の様子をみよう。表 2 を見ると、現在の住居は「社員寮・社宅」にいる者が多い。会社までの片道の通勤時間も、30 分未満の者が半数以上である。また、勤務先での仕事の内容は、「研究・開発」が 25.9% と最も多い。

卒業後の給与はどの程度か。同期入社の大学卒と比較すると、「短大卒と同程度」とする者が 53.7% と半数以上を占めている。それ以上の者もかなり多い。ただし、「大学卒と同程度」と回答してきた者の中には、技術科学大学等に編入学後に

表2 卒業後の勤務先

従業員数	100未満	100~500	500以上	官公庁
	13.0%	22.2%	53.7%	11.1%
住居	自宅	社員寮	アパート	
	31.5%	40.7%	27.8%	
通勤時間	30分未満	30~60分	60分以上	
	55.6%	35.2%	9.3%	
給与	短大より下	短大と同	短大より上	大卒と同
	9.3%	53.7%	20.4%	13.0%

(N=54名)

表3 職場での仕事の内容

企画設計	研究開発	生産管理	生産技術	システムエンジニア	サービスエンジニア	その他
14.8%	25.9%	14.8%	14.8%	11.1%	9.3%	9.3%

(N=54名)

卒業・就職した者（つまり大学卒）が数名含まれている。ここでは同期入社<sup>2)</sup>の大学卒と比較させたが、これを同年齢の大学卒と比較させると、短大卒より上の者がさらに増えるのではないかと思われる。

さて、調査対象の卒業生は、卒業してすでに3~7年目を迎えている。この間に、転職の経験のある者はどの程度いるのか。回答者の中でそのような経験のあった者は、20.4%（11名）であった。一体、どのような者が転職しているのか、詳しい検討は6節で行われる。

最後に、このような勤務先での生活に対する満足感をみよう。総理府の調査では、23~24歳の勤労青少年のうち、現在の職場に満足している者は60.6%である。高専卒業生の場合はどうか。

図3を見ると、現在の勤務先に就職できたことについても、職場における生活についても、満足している者が多い。仕事に対するやりがいも、85.2%の者が感じている。しかし、職場で自分の能力を発揮できているかという点、37.0%の者は「発揮できていない」と答えている。

ここで、以後の分析で使用するため、これら4問への回答をもとに、職場における適応感を表すと思われる尺度を作成したい。1)~4)のカテゴリーにそれぞれ0~3の値を与え、個人ごとの回答の仕方に応じて、これら4問の合計値を求め

問1. 今の勤務先に就職できた事には満足していますか。

- 1) 満足 25.9% 2) まあ満足 51.9%  
3) 少し不満 16.7% 4) 不満 5.6%

問2. 今の職場における生活には満足していますか。

- 1) 満足 11.1% 2) まあ満足 57.4%  
3) 少し不満 20.4% 4) 不満 11.1%

問3. 現在の仕事に対するやりがいは感じますか。

- 1) とても感じる 14.8% 2) わりと感じる 70.4%  
3) あまり感じない13.0% 4) 全く感じない 1.9%

問4. 現在の職場で自分の能力は発揮できていますか。

- 1) とても発揮 9.3% 2) わりと発揮 53.7%  
3) あまり発揮できていない 33.3%  
4) 全く発揮できていない 3.7%

図3 職場生活への満足感

た。その値は、0~12の範囲に分布する。値が小さいほど、その職場に満足してよく適応していることを、値が大きいほど、不満があるなどして適応できていないことを表していると思われる。全体の平均値は4.67、標準偏差は2.34であった。

この値と、図3の各問との相関係数を調べると、いずれも0.78~0.83の範囲にある。この値には、これら4問の内容がよく反映されていると思われる。そこで、この値をもとに全体を3つに区分し、0~3を「適応」、4~6を「普通」、そして7以上を「不適応」とした。表4は、これらの割合を示したものである。以後の節で、各項目を職場生活への適応別に分析する時は、この区分が利用される。

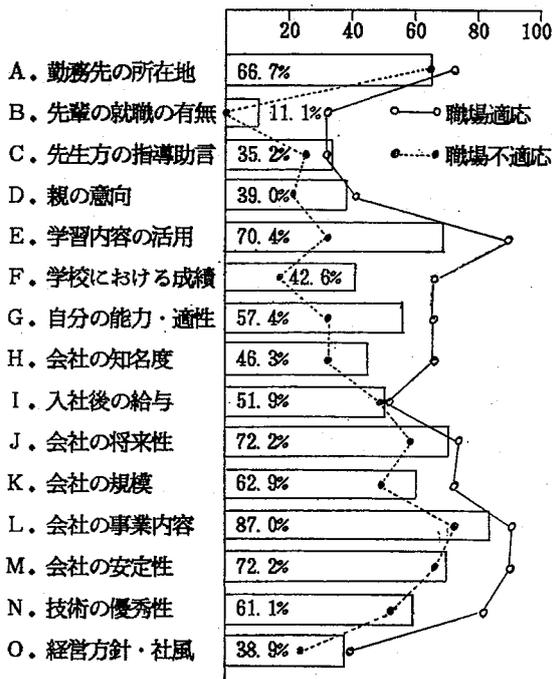
表4 職場生活への適応感

尺度	適応	普通	不適応	全体
実数	16名	25名	13名	54名
百分率	29.6%	46.3%	24.1%	100.0%

#### 4. 就職時の考慮事項

ここでは、卒業生は高専卒業時の就職先を決める時にどのようなことを考慮したのか、そして、その考慮の仕方は、以後の職場生活への適応とどのようなかかわりをもっているかをみる。

卒業時の就職先を決める時に考慮したと思われる15項目について、それぞれ、「とても考慮した」「わりと考慮した」「どちらかという考慮した」「あまり考慮しなかった」「まったく考慮しなかつ



\*職場適応別では、転職経験者は除いて集計した。

図4 就職時の考慮事項（職場適応別）

た」の5カテゴリーで回答を求めた。図4では、このうち「考慮した」者の割合が示されている。

これをみると、最も考慮された項目は、会社の「事業内容」である。87.0%の者が考慮したとしている。次いで、「将来性」「安定性」も72.2%の者が考慮しており、総じて、会社側の条件が強く考慮されているようである。自分自身に関する項目では、「学習内容の活用」（高専で学んだことを生かせること）が、70.4%とよく考慮されている。

折れ線グラフは、これを職場生活への適応別にみたものである。ただし、卒業時の就職先から転職している者は除いて集計した。

これをみると、幾つかの興味ある傾向がみられる。まず、職場適応群は職場不適応群と比べて、いずれの項目もよく考慮していることが分かる。特に、「学習内容の活用」「事業の内容」「安定性」は、いずれも92.2%の者が考慮している。それに対して、職場不適応群は、特にB～Gの自分自身にかかわる項目を考慮する者が少ない。「学習内容の活用」は33.3%、「学校における成績」は16.7%の者しか考慮しておらず、職場適応群と比べて大きな差がある。

表5は、差の大きな項目について、その考慮の仕方による職場生活の適応状況をみたものであ

表5 就職時の考慮事項と職場適応

職場適応		適応	普通	不適応	計(数)
全 体		27.9	44.2	27.9	100.0(43)
学習内容活用	考慮せず	7.7	30.8	61.5	100.0(13)
	考慮した	36.7	50.0	13.3	100.0(30)
学校での成績	考慮せず	17.4	39.1	43.5	100.0(23)
	考慮した	40.0	50.0	10.0	100.0(20)
自分の適性	考慮せず	25.0	25.0	50.0	100.0(16)
	考慮した	29.6	55.6	14.8	100.0(27)
会社の規模	考慮せず	13.3	46.7	40.0	100.0(15)
	考慮した	33.3	44.4	22.2	100.0(27)
会社の安定性	考慮せず	9.1	54.5	36.4	100.0(11)
	考慮した	34.4	40.6	25.0	100.0(32)
会社の優秀性	考慮せず	11.8	47.1	42.2	100.0(17)
	考慮した	38.5	42.3	19.2	100.0(26)

\*ここでは、転職経験者は除いて集計した。

る。いずれも、考慮しないと答えた者は、就職後の職場生活に不適応の傾向にあることが分かる。

こうしてみると、職場生活に不適応の者は、入社以前にすでに大きな問題があるといえるのではないか。就職時の会社選定においては、会社の内容ばかりではなく、その会社が自分に合うのかどうか、自己の適性に関する項目も十分に考慮する必要があると思われる。

### 5. 職場生活と職場適応

ここでは、卒業後の職場における生活について、さらに詳しくみていきたい。

職場における仕事の内容についてはすでにみた。では、その仕事は、同期入社の大学卒と比べてどの程度の差があるのだろうか。図5を見ると、そのような差は「ない」とする者が多い。特に、40.7%の者は「全く差はない」としている。そして、仕事をこなす能力の上での差も、「感じない」とする者が66.6%と全体の3分の2を占め、頼もしい限りである。

これを、職場生活への適応別にみると、職場生活への適応群は、むしろ、大学卒と比べて仕事の内容に差があり、能力の上でも差を感じるとする者が幾分多いようである。それに対して、不適応群では、仕事をこなす能力の上では差を感じないのに、仕事の内容には差があるとする傾向がみられる。あるいは、このことが、職場に対する不満

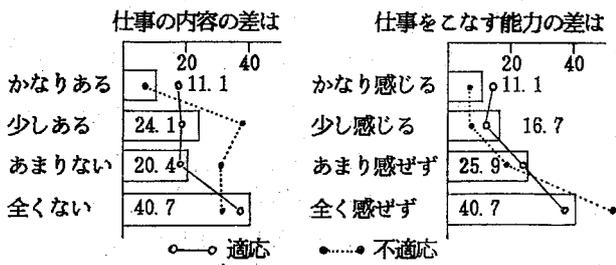


図5 同期入社 of 大学卒との差

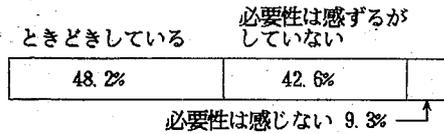


図6 帰宅後に仕事に関する専門的知識を得るための勉強は

の一つであるのかもしれない。

さて、高専卒業生は、技術者としてかなり専門的な仕事をしていると思われるが、昨今の技術革新の激しい時代では、卒業後もかなりの勉強を強いられるのではないと思われる。実際、図6を見ると、帰宅後も仕事に関する専門的知識を得るための勉強の必要性を、9割以上の者が感じている。そして、ときどきとはいえ、約半数の者は実際に勉強している。

では、そのような勉強の中で、英語の力が必要になることはどれ位あるのか。高専卒業生は、よく英語の力が弱いと言われるが、実際の仕事の中でそれが必要とされることはどの程度あるのだろうか。図7を見ると、仕事の上で英語の文献を読まねばならぬことが「ある」者は、たまにある者を含めると74.1%である。英語の会話力が必要となることが「ある」者も37.1%に及ぶ。海外出張の経験のある者は、まだ1名しかみられなかったが、それでも、「将来、海外出張を命ぜられそうだ」とする者は22.2%もあった(図は略)。これらの結果をみると、在学時の英語力強化の必要性が、ますます強く感じられてくる。

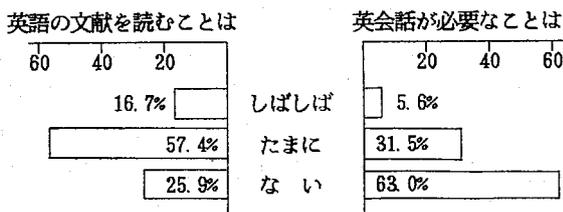


図7 職場における英語の必要性

次に、仕事の上で電子計算機を使用することがどれ位あるかをみよう。図8を見ると、約8割の者は、何らかの形で電子計算機を使用することがある。特に、29.6%の者は、「ほぼ毎日」使用している。また、仕事の上のプログラムを自分で作ることも、約半数の者が「ある」としている。ただし、「しばしばある」としている者の中には、プログラムを作るのが仕事の者も含まれている。使用する言語は、BASICが40.7%と最も多い。ということは、使用されている電子計算機はパソコンが多いということであろう。高専における情報処理教育は、FORTRANが主流であると思われるが、以上の結果をみると、BASICもある程度やらざるを得ないようにも思われる。

このように見てくると、英語や電子計算機に関する知識は、卒業後の職場でもかなり役に立っている。では、全般的にみて、高専で学んだことは現実の職場の中ではどの程度役に立っているのだろうか。図9を見ると、職場における専門の基礎的素養としては、約7割の者が「役に立っている」としている。また、実際の仕事を行う上でも、半数以上は役に立っている。

役に立っている場合には、その具体的科目名の記述も求めた。どのような職場でどのような仕事

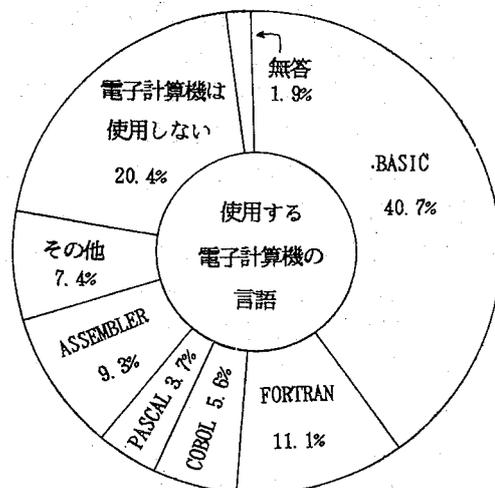
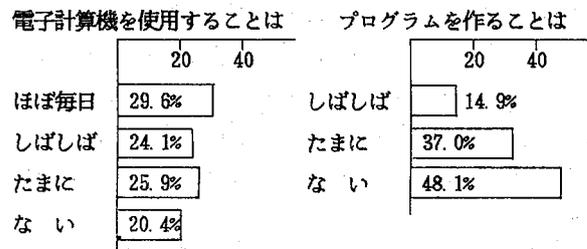


図8 電子計算機の使用状況

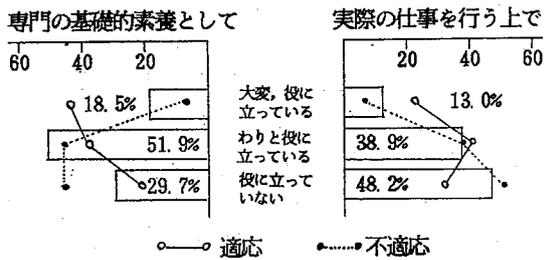


図9 高専の学習内容の有益性

を任せられるかにより、必要とされる知識は異なっており、そこに記された科目名を列記すると、専門科目の必修科目の大部分を記さなければならなくなる。このことは、実践的工業技術者を養成する高専として、まさにそのカリキュラムの妥当性が示されているようにも感じられる。

以上のことを職場適応別にみよう。適応群は、専門の基礎的素養としても、実際の仕事を行う上でも、高専の学習内容はかなり役に立っている者が多い。これに対して不適応群では、「大変役に立っている」とする者は、いずれも7.7%にすぎない。このような、高専の学習内容を生かせる職場にいないということも、不適応の一つの要因になっているように思われる。

ところで、このような職場において、上司や同僚との人間関係はどのようになっているのだろうか。図10を見ると、総じて「うまくいっている」者が多い。そして、約7割は、その関係が職場を離れたつき合いにも及んでいる（図は略）。しかし、職場不適応群は、ここにおいても「うまくいっていない」者の割合が目立つ。その約4割は、職場における人間関係にも問題があるようである。

表2では、大学卒と比較した給与をみた。最近では、年功序列型から徐々に能力主義に変わりつつあるともいわれるが、卒業生の勤務先で、その給与はどのような決め方をしているのだろうか。図11を見ると、やはり年功を中心として決まってい

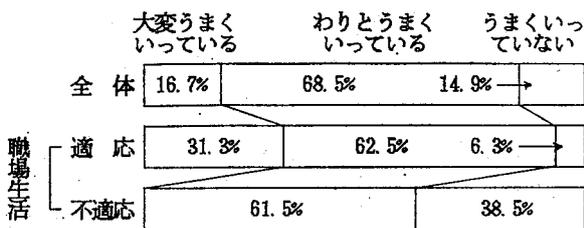


図10 職場の上司や同僚との人間関係

- 1) 年功のみによって決まっている 16.7%
- 2) 年功を中心にして、多少成績が加味されて決まっている 44.4%
- 3) 年功と成績が、同程度に加味されて決まっている 24.1%
- 4) 成績を中心にして、多少年功が加味されて決まっている 11.1%
- 5) 成績のみによって決まっている 0.0%

図11 給与や昇進はどのように決まっているか

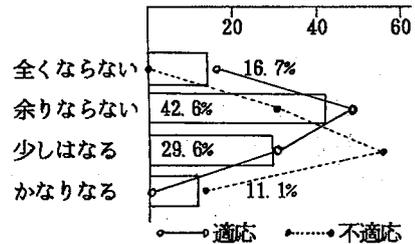


図12 高専卒という学歴は、これから良い給与と良い地位を得るにあたり、何らかの障害となることと思いますか

る所が多いようである。「成績のみによって決まっている」とする者は、1名もいなかった。

高専卒業生は、こうした中で、これから昇給や昇進をしてゆくことになる。その場合に、人数的にマイナーな「高専卒」という学歴は、どのような意味合いをもってくるのだろうか。何らかの障害となることはあるのだろうか。図12を見ると、約4割は、ある程度「障害になる」と考えていることが分かる。この問は、「障害にはならない」とする者がもっと多数であろうと予想して設けたものであったので、これはやや意外な結果であった。「高専卒では取締役になれない」と書いてきた者もあり、ある程度の上限があると感じているのかもしれない。

これを、職場適応別にみると、不適応群ほど、「障害になる」と考えている者の多いことが分かる。高専卒業生は、その一期生でさえまだ30代後半である。実際に障害となるかどうかは、今後の彼らの努力を見守る以外にあるまい。それは、全くの杞憂であると思いたいものである。

以上、卒業後の職場における生活を、種々の側面からみてきた。最後に、その職場に今後も継続して勤務したいと思っているかどうかをみよう。図13を見ると、約7割は、「今後もずっと勤めていたい」、あるいは「変わりたい気持ちが無いわけではないが、結局は、このまま勤めることになる

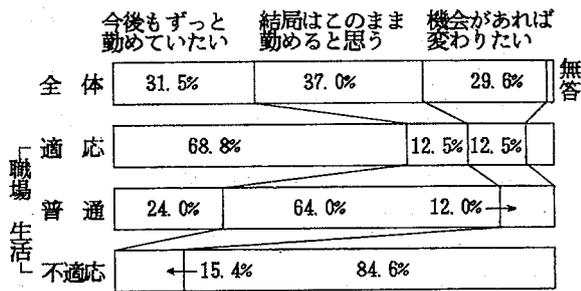


図13 現在の勤務先に今後も勤めていたい

と思う」と答えている。総理府の調査でも、67.6%がそのように答えている。

しかし、これを職場適応別にみると、かなり対称的な結果である。適応群の約7割は、継続して勤務することを進んで希望しているのに対して、不適応群では、実に84.6%の者が「機会があれば変えたい」と答えている。かなり深刻に悩んでいることがうかがわれ、痛ましい限りであるが、表5でも見たように、元を正せば、就職時に自己の適性等を十分に考慮しなかったことに原因があるように思われる。改めて、会社選定時の慎重さが望まれる。

### 6. 転職経験者の職場生活

今回の調査では、約2割(11名)の卒業生が転職の経験をもっている。ここでは、その転職経験者について、詳しく分析してみたい。

まず、転職した理由をみよう。理由について記述のあった者は10名。そのうちの4名は「地元に戻るため」、5名は「高専の内容が活かされない」などの理由をあげている。他の1名は、「公務員志望のため」転職したとしている。

総理府の調査では、24歳までの高等教育機関卒業者のうち、18.4%が転職の経験があるという。また、大阪府立高専では、昭和42~55年度の機械工学科の卒業生を調査し、その19.4%が卒業時の就職先を退職しているとしている。退職の理由は、「職種が向いていない」とする者が25.6%と最も多いようである。

次に、転職経験者の在学時の生活をみよう。結果のみを示すと、卒業時の成績は「中位の下」または「下位」にあった者が半数以上を占める。しかし、学校での生活については、転職経験者の9割以上は「充実していた」としており、高専を卒

業したことについても、特に不満を感じているわけではない。ただ、「在学時に何でも話し合える友人は得られましたか」との間では、「得られた」とする者は転職経験者の54.5%にしかすぎなかった。全体では77.8%の者が「得られた」としているのに比べると、かなり大きな差がある。回答数が少ないので一概には言えないが、あるいは、職場における人間関係の問題も、転職を考える一つの理由であったのかもしれない。

ところで、転職経験者は、卒業時の就職先を決める時はどのようなことを考慮していたのだろうか。図14では、転職しない者との差の大きかった項目が示されている。最も差の大きな項目は、「自分の能力・適性」を考慮したかどうかである。転職経験のある者でそれを考慮した者は、36.4%にしかすぎなかった。自分の「学校での成績」も、27.3%の者しか考慮していない。転職したことによる自省の念が特に強いのかかもしれないが、このような自分自身に関する項目で大きな差がみられたことには注目してよいであろう。会社側の条件ばかりに目をとられず、もっと自己を見つめた就職活動が必要であると思われる。

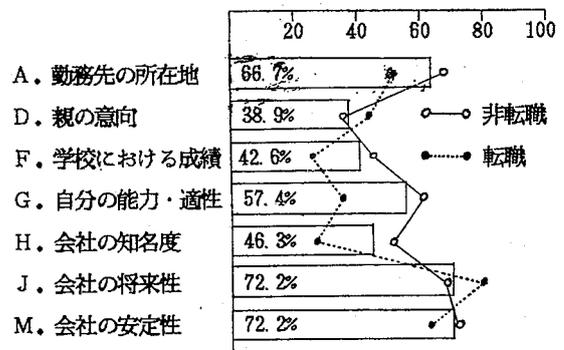


図14 就職時の考慮事項(転職経験別)

では、転職後の職場では、どのような生活をしているのだろうか。図15を見ると、転職経験者は自宅から通勤している者が多く、会社も500人未満の中小企業が多い。このことは、いわゆる地元へのUターンによるためと思われる。大阪府立高専の調査でも、再就職先は地元の占める割合が増加し、企業規模も中小企業の占める割合が高まっている。

一方、仕事の内容は、同期入社の大学卒と比べて差のない者が大半である。仕事をこなす能力の上でも差を感じていない。そして、高専の学習内容が活かせるような職場にいることが分かる。最

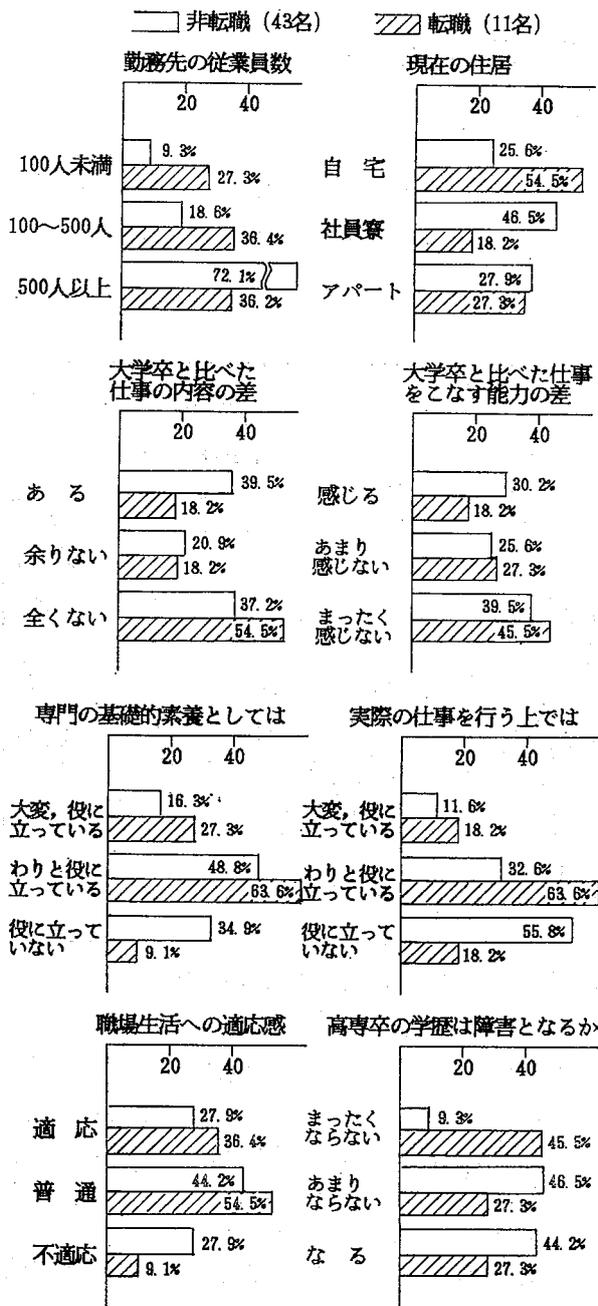


図15 転職経験者の職場生活

初の職場を一度退職することにより、改めて自分に適する職場をよく考えた結果であると思われる。総じて、新しい職場での生活にはよく適応しているようである。それゆえであろうか、高専卒という学歴は、今後の職場生活において「全く障害にはならない」とする者が多い。

このようにみえてくると、転職経験者は、転職という一つの重大な経験はしたものの、そのことによって、より自分に適した職場に変わることができたといえるであろう。それは、決してマイナス

の経験ではなかったようである。

## 7. おわりに

高専卒業生は、就職後は職場の中でどのような仕事をしているのか。その具体的な内容を在校生に知らせるといふ目的で、この調査は企画された。結果をまとめてみると、高専卒業生が、大学卒業生と比べてもほぼ対等の仕事をしていることが分かり、在校時の生活しか知らなかった著者としては、「高専生」というものを改めて見直した感がある。また、高専の社会における意義についても、再認識させられた。特に、高専の学習内容が卒業後もかなり役に立っていることなど、時代の進展に合わせて、高専の教育内容を充実させてゆく必要性も痛感される。回収率は低かったものの、この調査結果が、今後の高専教育を考える上で何らかの参考になれば幸いである。

最後に、この調査を行うにあたっては、教務主事並びに学生課教務係の協力をえた。また、調査の結果については、専門学科の各主任より貴重な御意見をいただいた。特に、本校校長永倉喜一郎先生には、この調査の意義を御理解下さり、予算面で特段の御配慮をいただいた。ここに、厚く感謝の意を表す。

## 参考文献

- 1) 島美・梅野善雄：工業高等専門学校学生の意識を高める教育方法の研究(2)―高専生のやる気の諸相―，一関高専，昭和60年3月
- 2) 総理府青少年対策本部：組織で働く青少年の意識，昭和54年2月
- 3) 篠谷寿・杉野英太郎・柳井田勝哉：高専卒業生の再就職に関する実態調査，大阪府立高専研究紀要 第17号，昭和58年10月